

開拓記念館 だより

2003年1月号

Historical Museum of Hokkaido

VOL.32

No.5

- 第135回テーマ展「アイヌの生活文化展によせて」
- 第136回テーマ展「はかる道具のいろいろ」
- 第55回特別展関連講演会「岩面刻画の謎をさぐる一洞窟を利用した人びと」
- 北方文化共同研究事業調査報告「砂漠に浮かぶ森」
- 分野別研究紹介「博物館の展示・収蔵環境と保存対策」



すい どう ちょく はん き

自家製の水稲直播器

寒冷な北海道では、稲の生育期間を短くするため、田植えをしない種籾^{じかま}の直播きが広く普及した。1905(明治38)年に籾を一定間隔で播く黒田式直播器が考案され、省力化することで広面積の栽培が可能となった。昭和10年代に温冷床苗代が普及するまで、水稲直播器には多くの改良が加えられて全道で使用された。

資料を寄贈された土田与志雄氏(恵庭市)は、明治末頃に先祖が石川県から胆振管内厚真町高丘へ団体移住で入殖して以来3代続いた農家である。この直播器は、1935(昭和10)年頃寄贈者の父与一が製作した。大部分は木とブリキ製で軽く、ブリキ部分はタコアシ(黒田式)とネコアシ(沢登式)直播器のアシ(種子導管)を再利用している。把手の開閉に連動して、種子箱底の種子孔板が往復して播種する往復動式の水稲直播器である。

収蔵番号：143,824

寸 法：46.5×185.7×68.3cm

播種株数：16株(8条2列)

展示公開：開拓の村「旧札幌拓殖倉庫」

写真撮影：為岡 進

山際秀紀／学芸部 学芸第二課学芸員

第135回テーマ展

『アイヌの生活文化』展によせて

—展示事前評価の試みをふまえて—

1月11日(土) から2月16日(日) まで

北海道開拓記念館 特別展示室

出利葉浩司／学芸第二課学芸員



北海道開拓記念館では、年に二回の特別展示会のほか数回のテーマ展示会をおこなっています。どちらの展示会も北海道の歴史や文化に関係の深いテーマを選び、それをより詳しく紹介する企画がおおいのですが、なかには「リバイバル」展示会もあります。これは、絵画やアイヌ民族の衣服、やきものなど、比較的観覧希望が多いものを、期間をおいて繰り返し公開するものです。とくに絵画や衣服などは、保存上、常に展示しておくというわけにはいきませんので、この期間をおいての繰り返し公開は都合がよいのです。

さて、開拓記念館には約5000点のアイヌ民族資料がありますが、そのなかでも人気の高いものに、アイヌ民族の衣装があります。そこで、今回のテーマ展でも、衣文化をキーワードに、アイヌ民族衣装を公開いたします。これまでにも、『アイヌの装い』展(1984年)『アイヌの服飾』展(1988年)『現代に生きるアイヌ文化』展(1993年)『アイヌ民族の装い』展(2000年)などで、記念館が所蔵するアイヌ民族衣装を公開し、おおくの観覧者にアイヌ文様の美の世界を堪能していただきました。また、自らの伝統を受け継いでいこうとするわかいアイヌの人たちも、展示場という落ち着いた空間のなかで、効果的な照明を当てられ、ケースにきちんと配列された資料を通して、伝統の世界を再認識されたようです。

同じ資料が繰り返し展示されたのですが、じつは展示の趣旨、展示方法、解説の仕方が異なっていました。たとえば、『アイヌの装い』展では、故児玉作左右衛門先生の収集資料の紹介もかねていたのですが、着物のバリエーションに主眼を置きました。『アイヌ民族の装い』展では、

美を強調することをかんがえ、展示室内の照明を暗くして、そのなかに主文様だけが浮かび上がるような展示手法を採ってみました。入室された方はなにか宝石店にでも入ったような感じをもたれたのではないかと思います。アイヌ民族資料に限らず、これまで日常生活具は誰が作っても同じとされ作者名が明記されることはなかったのですが、『現代に生きる…』では、アイヌ伝統工芸品の製作者名を明示しました。現代アートと同列に扱うことで、これまでの「博物館民族資料」の見方の変更をうながすとともに、伝統が今日まで受け継がれていることを意識してみたのです。この展示会は、展示品の作者を明記した日本で初めての大きな展示会となりました。『アイヌ民族の装い』展では、来館者が衣服をみた「感じ」を大切にし、そうした印象を生み出す「技術」に視点を置いてみました。

このように、「展示の裏にある学芸員のかんがえ」もまた、博物館展示のおもしろいところで、博物館は学芸員しだいといわれる所以でもあります。

ところで、今回のテーマ展示会では、あたらしい試みとして、展示の事前評価ということにチャレンジしてみました。「展示の事前評価」とは聞き慣れない言葉かもしれませんが、展示会をおこなうまえに、タイトルや展示方法、解説文のわかりやすさ、興味のある資料などについて、ひろく皆さんの意見を聞き、それを実際の展示に取り入れていく方法のことです。展示を、博物館スタッフだけではなく、利用する範囲に住む人たちと共に作り上げていくのです。

誰に、何を聞くかは、さまざまです。

これまで他館でおこなわれた例では、「あなたが展示会に出かけたいくなるタイトルを選んでください」、「このタイトルからなにをイメージしますか」というものもありますし、「あるひとつの事柄や資料を示して、そこから連想するものを聞く」というものもあります。調査対象者も博物館ファンに限りません。これまで一度も出かけたことのない人を対象に、「どんな展示物があれば、博物館に出かけたいくなりますか」ということを聞いたものもあります。

こうした質問からもわかるように、博物館はいま、何度も足を運んでもらうにはどうすればよいか、これまで博物館に來たことがなかった人にも足を向けてもらうにはどんな企画がよいかということ、真剣に考えはじめています。

わたくしたちも、北海道大学佐々木亨研究室と共同で、アイヌ文化のイメージ、衣装展示などについて、博物館離れや活字離れがいられているわかい世代を対象に、アンケートをおこなってみました。

その結果、実際のものに触れることのできる体験を希望する人が31パーセントと体験展示に予想以上の人気があることや、アイヌ文様の特徴を考えてもらうための他民族の衣服との比較展示がかえってアイヌ文様をわかりにくくしているという指摘や時代性をはっきりしてほしいという指摘、現代のエ芸作品の展示もみたいという希望など、これまでわたくしたちが気づけなかったこともわかりました。

今回のテーマ展示では、この調査をふまえて、これまでとはまた違った、アイヌ服飾の展示をおこないます。ご期待ください。

第136回テーマ展

はかる道具のいろいろ

3月1日(土) から3月30日(日)

北海道開拓記念館 特別展示室

丹治輝一／学芸部長（産業史担当）

一般には公開されていない博物館の収蔵庫には、その博物館の資料収集や研究・調査活動の取り組みが反映されています。当館の場合も、重点的に収集した資料、学芸員の研究テーマ、あるいは展示会の開催に沿って集められた資料などは比較的充実しています。一方で、収蔵点数は多いにもかかわらず、これまで調査も十分でなかった資料もあります。

「はかる道具」もそのひとつです。

現在の計測法では、はかる度お具（計量器）の範囲も時間、速さ、光度、騒音などまで拡大され、デジタル化の時代ですが、かつては「度量衡」（長さ、容積、重さ）が基本で、ものさし、研、秤が中心でした。

当館には、桁と秤を中心に道内各地から収集された度量衡器が約500点収蔵されています。3年ほど前、国立科学博物館が国内に保存されている計量に関する歴史的資料の調査を計画しました。これをきっかけに、当館の関係資料を再整理してみました。

桁、秤ともさまざまな種類が収蔵されています。桁では容量に五勺、一合、二合五勺、五合、一升、五升、一斗、用途では穀用、液用、形態上

からは方形のほかに円筒形（一斗桁）などがあり、秤には棒秤（銀秤、皿秤、千木秤）、掛秤、上皿自動秤、天秤、バネ秤、台秤などがあります。収蔵点数の少ないものさしでは曲尺、直尺、たたみ尺、輪尺などです。

社会生活の維持に欠かせない度量衡は江戸時代には桁座、秤座の設置により統一され、明治期以降度量衡制度が整備されてきました。1885年（明治18年）のメートル条約への加盟、尺貫法、メートル法、ヤード・ポンド法の混用を経て1921年（大正10年）には10年間の猶予期間をおくメートル法専用への転換方針がとられています。その後1933年（昭和8年）から40年代前半にかけては尺貫法の存続運動が起こり、猶予期間も二度にわたり延期され、メートル法が完全実施に移されたのは1959年（昭和34年）1月のことでした。

はかる道具を一つ一つ見ていくと計量能力、製作上の特徴、製造者、度量衡制度との関係などを知ることができます。度量衡器の種類、親格は細部にわたり規定され、その製造は免許制で、製造者・製造地の焼印や刻印、検定印が押されています。ほとんどは本州各地で製造されたものですが、桁には函館製も含まれています。桁や秤はすべて本州で作られたもの、と思われがちですが、函館には慶応2年（1866年）に江戸の秤座の出張所が置かれ、廃止される1876年（明治9年）まで三種類の秤が製造されていました。明治初期から昭和30年代まで民間の桁製造者も1～2営業していました。



秤

また、明治維新後、度量衡制度を実施する上で製造者がいなかった札幌では、開拓使が度量衡器製造の承認を得て工業局器械所度量衡製造所で1876年6月から79年3月までの間に、度量衡三器を製造し道内各地に供給しています。ただし、函館の秤座、開拓使時代の度量衡器は収蔵されていません。その後、一時期札幌にも桁の製造者がいました。しかし、函館、札幌での製造はごく一部で、明治10年代以降、北海道にも本州の度量衡器が大量に入ってきました。

検定印も制度改正による変遷があり、製造年代や使用年代を推定する手がかりとなります。所蔵資料のなかで最も古いのは江戸の秤座の銀秤で、約300年前のものも数点含まれています。その他、自家製の桁や、錘に石を使った棒秤など規格外のものも見られます。

商取引や商店、家庭で広く使われてきた身近な道具である度量衡器にまつわるエピソードなどについても掘り下げる必要がありますが、この展示会では、これまでの収集資料の整理をもとに、桁、秤、ものさしの他、測量器具なども含め、館所蔵のはかる道具を中心に、計量器と生活とのかかわりの歩みをたどります。



桁

第55回特別展「洞窟遺跡を残した縄文の人びと」関連講演会

「岩面刻画の謎をさぐる—洞窟を利用した人びと—」

9/21(土) 13:30~15:30 かでる2・7

講 師：木村 重信 氏／大阪大学名誉教授

岩面刻画という用語は一般的に聞きなれない言葉であるが、考古学や先史美術などで用いるものであり、岩面画や岩壁画、岩面美術に含められ、岩に線刻された絵画を指して使用されている。この岩面刻画はアジアやヨーロッパなど世界各国に広く分布し、古くは旧石器時代からあり、その数は多く知られている。これらの岩面刻画は、各国で考古学あるいは先史美術など、学術的な評価がなされ大切に保存・活用されている。



日本の岩面刻画は、余市町フゴッペ洞窟と小樽市手宮洞窟の二ヶ所だけであり、古くから重要な遺跡として注目され、多くの研究がみられる。また、フゴッペ洞窟と手宮洞窟は、その重要性から国の指定史跡とされ保存・公開されている。しかしながら、何時、誰が、何を目的として、この岩面刻画を描いたのか、謎が多く、解き明かされた部分が少ない。国内では、これらの岩面刻画と比較研究するための類例がなく、この岩面刻画をアジアなどの地域に求められるが、これまで積極的な調査・研究が進展しなかった。これらの地域は、ご承知のとおり長い期間、日本人研究者が直接、足を踏み入れることのできなかった地域でもあった。

そこで、発見から半世紀が過ぎた現在、新たな視点で「フゴッペ洞窟」がかかえる課題の解明など、多くの研究者と議論が進められている。それは、余市町が進めるフゴッペ洞窟の保存・公開施設の老朽化にともなう保存事業と、平成12年より文部科学省科学研究費補助金地域連携推進研究費を受け実施している「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」である。このなかで、フゴッペ

洞窟発見50周年の「シンポジウム・フゴッペ洞窟—過去・現在・未来—」（平成12年）、「フゴッペ洞窟フォーラム」（平成13年）では、考古学はもとより先史美術、民族学、自然科学、保存科学など学際的な検討が進められた。また、フゴッペ洞窟関係の資料調査、古環境調査、フゴッペ洞窟の岩面刻画と関連する刻画の調査、また将来に向けたフゴッペ洞窟の役割についての調査などが並行して進められている。

しかも当館には、昭和26・28年の2ヵ年にそれぞれ実施され時の資料を所蔵している。この資料は、『フゴッペ洞窟』として昭和45年(1970)に刊行され、当館には昭和43年(1968)に寄贈された出土遺物である。その一部は、フゴッペ洞窟の保存施設で公開されていたものの、ほとんどが未公開であった。

このことから、特別展を開催した一つの目的として、「フゴッペ洞窟」の未公開資料を展示することであった。この特別展では、北海道で確認された洞窟遺跡を相対的に検討することで、洞窟遺跡が時代ごとにどのように変化したかを展示で示した。特に縄文時代からアイヌ文化にかけて洞窟の利用の変遷を示し、また洞窟を利用した時期はどのような古環境であったかを展示でたどった。その中でも、フゴッペ洞窟や手宮洞窟の岩面刻画が特異な存在であり、その謎を明らかにするためフゴッペ洞窟の岩面刻画をどう考えるべきか、今後どう検討するべきかなど、示唆的な意見をいただくことを目的に、先史美術を専門とされる木村重信氏(大阪大学名誉教授)を招き特別



木村重信氏

展の関連講演会を開催した。



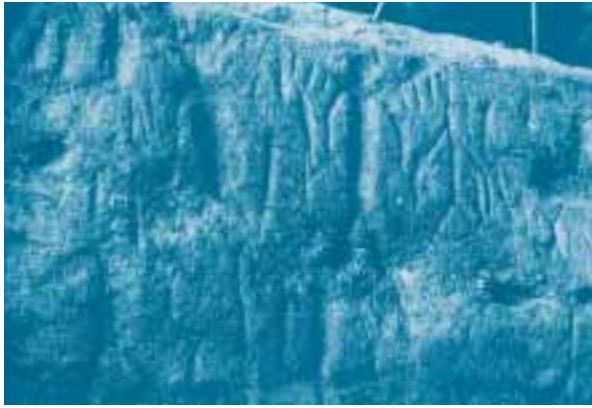
はじめに、先史美術に関する専門用語の解説について、スライドを使い具体的に示された。

岩面画は日本語で岩壁画や岩面美術ともいわれ、フランス語で art rupestre、英語で rock art といわれるものを指している。また、岩面画の技法には、彩画(peinture/フランス語、painting/英語)、刻画(gravure/フランス語、engraving/英語)、浮彫(relief/フランス語・英語)があり、刻画と浮彫との総称で岩面彫刻とも呼んでいる。しかも、石器などで刻んだ面に顔料などを塗りこむ彩画と刻画を併用したものもある。これらをフランス語では pe'troglyphe、英語では petroglyph と呼んでいる。岩面画の種類としては、洞窟美術(art parietal/フランス語、parietal art、cave art/英語)、岩陰美術(art d'abri/フランス語、rock shelter art/英語)に分類できる。これらの岩面画の特徴としては、岩面の凹凸や割目、穴などを意識的に利用して描く場合が多い。

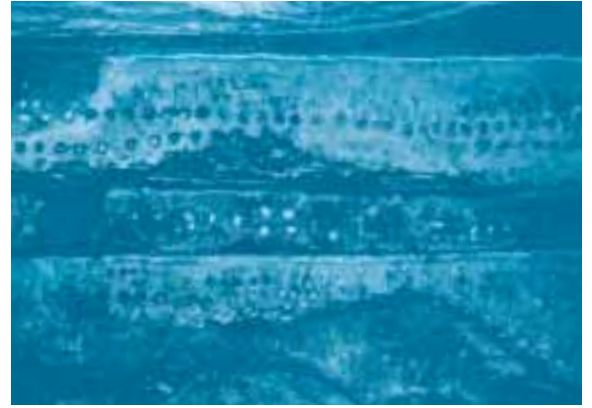


本題にはいると、岩面画を描いた集団、どのような人たちが世界各地に岩面画を遺したかを示された。

その岩面画の製作は狩猟採集民と



余市町フゴッペ洞窟の有翼人



Feles 洞窟の盃状穴

牧畜民に限られ、農耕民は岩面画を製作しないことである。例外的に中国の一部の農耕民が、岩面画を描いたものだけである。これらの集団の規定は、以下のとおりとされた。

一般的に狩猟採集民は、野生動物を狩猟し、野生植物や魚介類を採集する人たちである。また、後に野生植物の採集については、文化史的に重要な意味を持つことになる。それは野生植物を採集した人たちが、後に最初の農耕技術の発明者になるからである。

次に、牧畜民は生活様式により、遊牧民、移動牧畜民、定住牧畜民の3タイプがある。家畜には、牧畜的家畜と非牧畜的家畜の二種類がある。これらの人たちが対象とする家畜は、牧畜的家畜であり、群れをつくる有蹄類に限定される。しかも、牧畜的家畜には、①ツンドラのトナカイ、②ステップのウマ・ヤマヒツジ、③砂漠とオアシスのラクダ・ヤマヒツジ、④サバンナのウシ、⑤半砂漠高地のリヤマ・アルパカなどの5タイプの家畜がある。このように、現在、牧畜がおこなわれている地域は、乾燥地帯であるということである。

さらに、農耕民では、栄養繁殖による根菜農耕の古い栽培文化と、種子繁殖による農耕の新しい栽培文化に分けられる。

なぜ岩面画は、狩猟採集民と牧畜民が描き、農耕民が描かないのか。これは、文化的な違いに起因することであると指摘され、さらにフゴッペ洞窟の岩面刻画との関連を示唆された。また、世界各地の岩面画の年代的展開と、その特質については、洞窟美術は旧石器時代だけのもので、

中石器時代以降になると岩陰美術ないし岩床美術に大きく変化する。このことから、フゴッペ洞窟は岩陰美術であり、比較的に新しい時期のものであること、さらに、フゴッペ洞窟に岩面刻画を残した人たちは狩猟・漁労民であると示唆的な考えを示された。



フゴッペ洞窟の岩面刻画の人物像については、世界各地の人物像の様式と比較された。

人物像の様式については、自然主義的人物像、帯状人物像、厚脚人物、線状人物、砂時計人物などがある。フゴッペ洞窟の岩面刻画の人物像は、峰山巖氏により分類され、直立像と開脚立像に分けられ、後者の仮装人物像と有翼人物像、さらに有角人物がある。これらと類似する作例は、世界各地に多く見られ、例えば仮装人物には鳥や獣に仮装したり、仮面を着用した人物像が多くある。また、フゴッペ洞窟の人物像と同様に、手に物品を持ったり、舞踊や狩猟をしたり、舟に乗る人物などは世界各地で頻繁にみられるものである。



また、フゴッペ洞窟の盃状穴の存在は、わが国ではかつて「凹石」と呼ばれ、国分直一氏が1981年(昭和56)に「盃状石」とされたものでもある。これを世界の事例と比較すると、最古の盃状穴は旧石器時代中期(La Ferrassie)であり、旧石器時代後期になると作例が多くなり、さらに新石器時代にはいと西欧から北欧の地域に広がる。例えば古代エジプトの神殿や石碑、北方ユーラシアの岩面画にも盃状穴が彫られている。

特に注目すべきは、Vanuatu 共和

国の小島LelepaのFeles洞窟では、フゴッペ洞窟と同様であり、その岩面に盃状穴が1列、2列、数列にあらわされている。また、A.D.910年ごろの年代にあたり、フゴッペ洞窟の年代により近いものである。この種の盃状穴は、南太平洋や東南アジアに広く分布している。わが国でも古代から近世まで各種の盃状穴が彫られたが、中世以降は鳥居、常夜灯、手洗石、石段など社寺の石造物に多い。特に、加古川下流域の飯盛山テラスにみられる多くの盃状穴がある。これらの盃状穴の意味については諸説があるが、旧石器時代から現代まで一定していたとは限らない。しかし、これらは豊饒ないし多産にまつわるものが多く、例えば古代エジプトにおける太陽または太陽神の象徴は、球体をはめこんだ盃状穴である。また、BoliviaのChimane族における盃状穴は、大きな石塊が群なるところに彫られ、豊饒祭儀場とされている。



これらについてまとめると、フゴッペ洞窟は岩陰美術であり、人物像や盃状穴などの岩面刻画が圧倒的に多い特徴があり、アニマティズムとか、アニミズムなどの存在も重要である指摘や、さらに狩猟・漁労民が描いた可能性について具体的な事例を上げて述べられた。

この講演会では、フゴッペ洞窟の岩面刻画の特徴と、世界各地の岩面画との関連性について示唆された。講演会には、約150名の参加者で「岩面刻画の謎」にせまることができた。

(学芸第一課学芸員／右代啓視)

2002北方文化共同研究事業調査報告

ロシア・サハリン州の調査から

砂漠に浮かぶ森 サハリン北部の車窓風景より

水島未記／学芸部・学芸第一課学芸員

「…それで、交通手段は何ですか。」

「車です。」

この言葉を聞いた時、私は軽いめまいを覚えた。時は7月下旬、場所はサハリン州立郷土博物館。調査旅行の現地打合せをしていた時である。

今年度の北方文化共同研究事業で、私を含めた2人がサハリンを訪れ、先方の研究者と共同で先住民の文化を中心とした調査を行った。博物館のあるユジノサハリンスクからサハリン北部まで行き調査するのは事前に決まっていたが、移動手段は知らされていなかったのだ。北海道を発つ前に現地の道路事情の悪さを散々聞かされ「尻の皮が厚くなるぞ」などと脅されていた私は、列車か飛行機ならいいな…と淡い期待を抱いていたのだった。タチの悪い風邪を1か月以上患っていた身には、11日間の悪路ドライブは苦行である。はたして最後まで体が持つだろうか？ そんな不安を胸に、旅は始まった。

実際に走ってみると、サハリンでは確かに舗装道路は都市部以外皆無に近い。しかし、幹線道路は想像していたほどの悪路ではなく、運転手は路面の凹凸を的確に避けて走ってくれた。ロシア製大型ワゴン車のベンチシートはゆったりした大きさで、バウンドするような揺れも慣れると心地よい。狭い日本車に1日中缶詰になって北海道の舗装道路を走るより疲労は少ないほどだった。

とはいえサハリンは広い。1日中走っても同じような景色が延々と続く。それでも、車窓を眺めていると、植生から環境の変化を感じることができる。南部ではトドマツが比較的多いが中央部ではエゾマツの割合が



丘陵を覆うグイマツの森

増える。そして、サハリンを代表する樹種グイマツは北に行くほど多くなり、北部では森林の大部分を占めるようになる。北部には湿原も多く、そこで採れる果実は人々の食卓を彩る。後日、飛行機や夜行列車では途中の風景が見えないため車にしたのだと郷土博物館のスタッフから聞かされた。苦行と思えた長距離ドライブも、彼らの配慮だったのだ。

サハリン北部には山がほとんどなく、幾重にも連なる丘陵にグイマツの森が見渡す限り続く。その地下には、アムール川が運んできた膨大な量の砂が厚く堆積しているという。砂がつくったなだらかな土地の表面をわずかな厚みの土壌が覆っており、その上に森林などの植生が成り立っている。「砂上の楼閣」とは壊れやすいもののたとえだが、ここは「砂漠に浮かぶ森」である。

道路も、木を伐り表土を剥いで砂を盛り上げただけのものであり、時間が経てばしだいに（大雨でも降ろうものなら一気に）崩れていく。森林も表土を剥がれた端から少しずつ浸食され、白い砂地に変わっていく。場所によっては、道幅の何倍にもわたって「砂漠化」が進んでいるように見えた。

所々で見た石油採掘地でも、広範囲にわたって砂が露出していた。おそらく、掘り尽くしたら砂地を放置したまま次の油井に移るのだろう。このようなもろい環境では、いったん砂が露出すれば容易には森林が回復しそうにない。砂地は広がる一方だろう。だが、今のロシアにはそんなことを考慮している余裕はないに違いない。

北サハリンでは大型の石油開発プロジェクトも話題になっている。経済効果などプラスの面だけが語られがちだが、森林や海、人々の暮らしへの影響も心配である。実際、石油関連施設やパイプラインの建設により先住民の生活が影響を受けている例もあると聞く。一方で石油会社は先住民の文化伝承活動にもお金を出している。現地の人たち自身はどう感じているのだろうか。調査を終えた私は、ユジノサハリンスクへの帰路、そんなことを考えながら車窓に過ぎる風景を見ていた。

ハードな旅程にもかかわらず風邪はいつの間にか治っていたが、帰国後振り返ってしまった。サハリンの空気が良かったのだろうか。「砂漠に浮かぶ森」が、いつまでも本当の砂漠にならないことを願わずにはいられない。



砂の道がどこまでも続く



分野別研究紹介

博物館の展示・収蔵環境と保存対策

研究メンバー；小林幸雄（学芸第一課）、小林孝二（学芸第二課）、堀繁久（学芸第一課）

博物館はさまざまな側面をもちますが、所蔵する資料をよりよい形で保存することは最も基礎的で、かつ重要な役割であることは言うまでもありません。開拓記念館においても、展示室にはさまざまな資料が展示され、また、資料を収納・配架するための専用スペースである収蔵庫には、道内各地から収集された膨大な資料が収蔵され、展示などに活用される出番を待っています。さらに隣接する開拓の村には、道内各地の建造物が移築・復元、あるいは再現されています。これらは現代に継承された遺産であり、長く後世まで伝えていく役割を我々は担っております。しかし、資料や建造物の保存といっても、博物館をよく利用される方でもなかなか目にする機会が少ないこともあって、博物館ではどのようなことに心を砕き、また実際に何をおこなっているのかなどが充分には知られていないのも事実です。分野研究「博物館の展示・収蔵環境と保存対策」では、このように博物館に展示・収蔵されている資料や建造物などをよりよく保存するための対策を明らかにすることを目指しております。

資料や建造物の保存を考える場合に、一方では、傷んでしまったり、壊れてしまったりといった劣化（れっか）を想定する必要があります。劣化については、素材や種類によって、例えば金属であれば錆が発生したり、木や竹であれば割れたり、折れたり、また絵画であれば、汚れや割れ、剥離・剥落などの劣化現象がみられます。個々の現象に関与する劣化要因やその過程は複雑です。実際の劣化を取り上げながら、どのような要因が関与し、どのような過程を辿りながら、結果的にどのような現象が引き起こされたのかを知ることが重要です。それぞれのおかれてある展示・収蔵環境を把握しつつ、具体的な保存対策を考えていくことが必要になります。この研究は、平成13年度から平成16年度までの4カ年計画で進めております。さまざまな環境要因の中でも、とくに代表的な①光・照明、②温度・湿度、③生物などによる影響について注目しています。実際のデータに基づきながら、各環境要因と資料や建造物の劣化との関連性を検討し、その結果から、劣化を抑制するための対策を導き出したいと考えています。

平成13年度は、光・照明環境について取り上げました。とくに、蝶や蛾などの昆虫類（鱗翅目）の羽の色に注目して調査を進めました。皆さんもご存知のように、春や夏に乱舞する蝶や蛾の羽は目に鮮やかな色彩を有しております。こうした標本が展示をとおして、具体的には蛍光灯などの照明の下に長期間曝されていた場合には、どのような変化が生じるのかを検討しました。残念ながら、展示照明の下に長期間あった蝶や蛾では、本来の美しい羽の色も、変化したり褪せてしまうという現象を引き起こしていました。蝶や蛾の羽の色は千変万化、七色をみることができますが、変褪色という点ではとくに紫色や赤色の系統に属する羽の色が際だって変化します。この結果から、蝶や蛾を展示する場合には、照明を必要以上の明るさにすべきではありませんし、必要以上に長く展示すべきではないことを指摘しなければなりません。

これからも博物館の保存を考える上で、意味のあるデータを明らかにすることを願いながら調査を進めていきます。

（文責：小林幸雄）



開拓記念館の常設展示場



開拓記念館の収蔵庫

日付	曜日	休館日	イベント
1.1	(水)	休館日	
2	(木)	休館日	
3	(金)	休館日	
4	(土)		
5	(日)		
6	(月)	休館日	
7	(火)		
8	(水)		
9	(木)		
10	(金)		
11	(土)		
12	(日)		
13	(月)	休館日	
14	(火)	休館日	
15	(水)		
16	(木)		
17	(金)		
18	(土)		
19	(日)		
20	(月)	休館日	
21	(火)		
22	(水)		
23	(木)		
24	(金)		
25	(土)		
26	(日)		
27	(月)	休館日	
28	(火)		
29	(水)		
30	(木)		
31	(金)		
2.1	(土)		
2	(日)		
3	(月)	休館日	
4	(火)		
5	(水)		
6	(木)		
7	(金)		
8	(土)		
9	(日)		
10	(月)	休館日	
11	(火)		
12	(水)		
13	(木)		
14	(金)		
15	(土)		
16	(日)		
17	(月)	休館日	
18	(火)		
19	(水)		
20	(木)		
21	(金)		
22	(土)		
23	(日)		
24	(月)	休館日	
25	(火)		
26	(水)		
27	(木)		
28	(金)		

展示会

第135回テーマ展
「アイヌの生活文化展」

1月11日(土)~2月16日(日)
9:30~16:30 特別展示室 無料

詳しくは本誌2ページをご覧ください。

普及行事

講習会「羊毛を紡ぐ」

①2月15日(土)～16日(日)
②2月22日(土)～23日(日)
10:00～15:00 講堂 無料

対象：学生・一般（10名、事前応募、① 1月16日② 1月23日
から受付）

講師：松崎孝一氏（染織家）

ホームスパンの基本となる紡毛機をもちいて毛糸をつくり
ます。また、羊毛の染色を学ぶ事ができます。あわせ
て手織の体験をしてみましょう。

なお、①、②は同じ内容です。

体験学習

「年中行事 お正月」

1月4日(土)～10日(金)
9:30～16:30
体験学習室 無料

まゆ玉飾りの下で、福笑い、すごろく、羽根つきなど、お正月の伝統遊具で遊んでみましょう。

わら細工「わら馬をつくろう」

1月4日(土)～2月2日(日)
9:30～16:30
体験学習室 無料

昔はいろいろな物がわらで作られてきました。今回は「わら馬」に挑戦してみましょう。
(詳細は電話で問い合わせ願います。)

「年中行事 節分」

1月30日(木)～2月2日(日)
9:30～16:30
体験学習室 無料

豊作や豊漁、家族の健康などを願い、悪鬼を追い払うための豆まきをしましょう。

「大工さんの道具箱
～はかる、切る、削る、つなげる～」

2月5日(水)～3月30日(日)
9:30～16:30
体験学習室 無料

大工道具と聞いて、皆様はどんな道具を思い浮かべますか？ それらは何を作る時に使われるのでしょうか？ 尺・寸など昔の長さの単位に親しみながら、のこぎり、かんなど、墨つぼなどの伝統的な道具を実際に使い、受け継がれた仕組みや工夫を考えてみましょう。

「年中行事 ひなまつり」

2月22日(土)～3月2日(日)
9:30～16:30
体験学習室 無料

女の子の健やかな成長や、幸福な縁組を願ってひな人形を飾ります。

利用者数

(平成14年10月1日～14年11月30日)

	館 内				館 外		計	年度 累計
	常 設 展示室	特 別 展示室	体 験 学習室	講座・ 講演会等	公 開 講座等	歴史 ギャラリー		
人数	11,241	9,940	3,679	2,038	42	53,433	80,373	393,179



北海道 開拓記念館 だより

ホームページ <http://www.hmh.pref.hokkaido.jp>

平成15年1月1日 VOL.32 No.5(通巻177号)
編集・発行 北海道開拓記念館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
TEL:(011)898-0456 FAX:(011)898-2657
テレホン・サービス:(011)898-2525